島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第9巻　7～14頁　昭和50年12月

「離　散」[1]と　音　楽

―― ユダヤ音楽研究 V ――

水　野　信　男*

Nobuo MIZUNO

Music in Diaspora
—Studies in Jewish Music (V)—

Abstract: What let Jewish music especially differ and characterize from the other nation's one is Diaspora which has lasted two thousand years (or more in some cases). Through Diaspora, in the communities in various districts, the Jews, having kept Synagogue song as spiritual support on the one hand, have assimilated their own music to the circumferential one. Hence they have developed the remarkable folk music.

This paper surveys the real circumstances of music in Diaspora.

ユダヤ音楽を，他の民族の音楽から，いちじるしく異なって特徴づけているのは，過去2000年，あるいは地域によってはそれ以上におよぶ，ユダヤ民族の Diaspora である。ユダヤ民族は，離散期を通じ，世界各地のコミュニティーにおいて，一方で，シナゴーグ音楽をその精神的支柱としながらも，その周辺民族の音楽を自己のそれと同化せしめ，豊富な民族音楽を形成していった。

本論文では，Diaspora とその音楽の実態を概観する。

I　ユダヤ音楽の歴史的概観

ユダヤ音楽の歴史を概観するには，H. Avenary. *Geschichte der jüdischen Musik* (*Musik in Geschichte und Gegenwart VII. Jüdische Musik* の項の A)[2] を通読するのが適当であろう。

今ここで，その項目にみえる歴史的区分を列挙してみよう。

a．古代
　(イ) 古代近東領域のヘブライ音楽
　(ロ) 神殿の音楽
b．シナゴーグ歌の成立（1世紀 n. Chr.）
　(イ) 形態形成期（ca. 500年 n. Chr. まで）
　(ロ) 創造期（ca. 500～950年）
c．中世の Diaspora の音楽（950～1500年）
　(イ) ユダヤ人の音楽生活への関与
　(ロ) 概念と形式としての "musica" の採用（950～1200年）
　(ハ) 新ユダヤ音楽の解釈（13～14世紀）
　(ニ) シナゴーグ的様式の育成（15世紀）
d．様式の放浪・混合
　(イ) 世界文化との均衡
　(ロ) Z'fath[3] の神秘主義
　(ハ) シナゴーグ歌の様式の混合・転用
e．ユダヤ・ヨーロッパ音楽（1750年～現代）
　(イ) Hasidim[4] の歌の慣用
　(ロ) ヨーロッパ様式への急転回
　(ハ) 現代の努力

以上の，細部にわたる歴史的区分は，つぎのような，ユダヤ史の大きな3つの時代区分を基盤としている。[5]

a．古代ヘブライ――エルサレムの崩壊する70年 n. Chr. まで
b．Diaspora (Exile)
c．現代――イスラエル国の再建。1948年以降

このうち，Diaspora は，その期間が，事実上，キリスト紀元以前より現代にまでひろがっており，いわゆるユダヤ的特質の根底の1つをなしている。Diaspora を通じて，ユダヤ人は，一貫して，不安定な，滔々と流れる離散生活をいとなんできた。そこには，国も民族的境界もなく，一般の民族にみられるような，自然に成立した民族集団の社会的規範もみられなかった。この結果，大多数のユダヤ民族音楽は，他国の土地における歌であり，その特徴は，「オリジナルの共通の音楽的素材の全世界への播種」といえる。そして，この素材は，相反する他国の文化によって，多様性をもった総合的形態をと

* 島根大学教育学部音楽研究室

ることになった。ユダヤ民族音楽の中には，外国の歴史的素材としばしばむすびついているものもあり，この点では，歴史的采邑の混合ともいえる。[6]

こうして，ユダヤ音楽の研究にとって，各ユダヤ人コミュニティーの歴史的背景，そして，その周辺民族の文化（とりわけ音楽文化）とのかかわりあいへの洞察が不可欠となるのである。

II　ユダヤ人コミュニティーの歴史的背景[7]

過去2000年以上にわたって形成されてきたユダヤ人コミュニティーは，地域的に，大きく，近東コミュニティー，セファルディム（地中海周辺及びヨーロッパの一部），アシュケナージム（東西ヨーロッパ）にわけられる。[8]

なお，**第1表**，**第1図**に，それぞれ，Diaspora のおもな地域と，Diaspora コミュニティーの歴史的相互関係を示す。[9]

1．近　東

(1) イエメン[10]

イエメンのユダヤ人は，20世紀の今日に至るまで，約2500年間，まわりをアラビア遊牧民族に囲まれた小さな領地の中で，確固とした共同生活を営んできた。イエメンの音楽的遺産は，ユダヤ民族音楽のもっとも富んだ，またもっとも古い源の1つとみなされている。その理由は，イエメンのユダヤ人が，ヨーロッパの影響範囲から隔絶されていたこと，そして，かれらが，あらゆる芸術的なものへの驚くべき素質をもっていたことである。ある時期には，エルサレム，バビロン，カイロなど，学問の中心地との精神的な交渉もあったが，イエメンのコミュニティーは，自己の宗教的・倫理的特性を保持し，地中海圏の支配的なセファルディムのグループからも比較的独立して，その音楽的儀式を保存した。伝説によれば，すでに，第1神殿の崩壊（587年 v. Chr.）以前に，イエメンへの移住は起こったとされている。しかし，考古学的証拠は，西暦3世紀のものが最初である。[11] イエメンのユダヤ人は，7世紀からイスラム教の影響を受けはじめた。そして，イスラムの熱狂的な宗派によって，ユダヤ人は苦しめられ，迫害されたが，このあたりの事情は歌にうたい継がれて今日に至っている。イエメンのユダヤ人たちは，1881年になってやっとパレスチナへ移住を始めたが，1949～50年，当時の人口約4万人だったその集団は飛行機でイスラエルへ送還され，ここにイエメンでのコミュニティーの生活は終わった。[12] かれらは，繊弱な肢体の南アラビアの血統に似ている。これは，ヒムヤル時代に混血したものである。[13] かれらは，町では，ゲットーの中で固有の高度に様式化された民俗音楽を保っていた。この民俗音楽は，古代のユダヤ人の Melos に，より近い。一方，農村のユダヤ人の場合は，アラビア民俗音楽との混合がみられる。イエメンのユダヤ人は，優秀な職人の集団だったが，仕事歌があまりないのは不思議な現象である。シャバト（安息日）のはじめにうたわれる Bar Jochai の歌を含む比較的古い宗教的民俗歌は，詩篇のうたい方との結びつきを明らかに示している。音階には，全音階 (Hexachord, Heptachord) のほか，メロディックなそしてカデンツふうの Nebenton をもつ，3音構造のもの（＝礼拝儀式での朗読）も用いられた。純粋な半音なしのペンタトニックや，ペルシァ-西アラビアのマカーム体系は，イエメン・コミュニティーにはない。

(2) バビロニア（イラク）[14]

バビロニアのユダヤ人コミュニティーは，その血統と発展段階によって，2つに分けられる。

a．バグダード

バグダードは，パレスチナを除けば，イエメンとならんで最古のユダヤ植民都市であり，その歴史は，バビロン捕囚（587年 v. Chr.）にさかのぼる。そこには，もっともよく保たれ完成された音楽儀式がみられるが，この古代様式の保存は，原則として聖書朗読にのみあてはまる。祈禱のための抒情詩そしてとりわけリズム化されたヒムなどには，アラビアの Melos の侵入がはっきり感じられる。

b．クルディスタン[15]

この地のユダヤ植民は，主にモスルとウルミア湖の間に散在した。山間部族でアラム語を話す。約2000年間，生活をつづけたのち，1950～51年，その大部分はイスラエルに移住した。（人口は，19世紀末ごろで12000～18000人。20世紀には，ペルシァ，クルディスタンのみでも12000～14000人と増加している。）

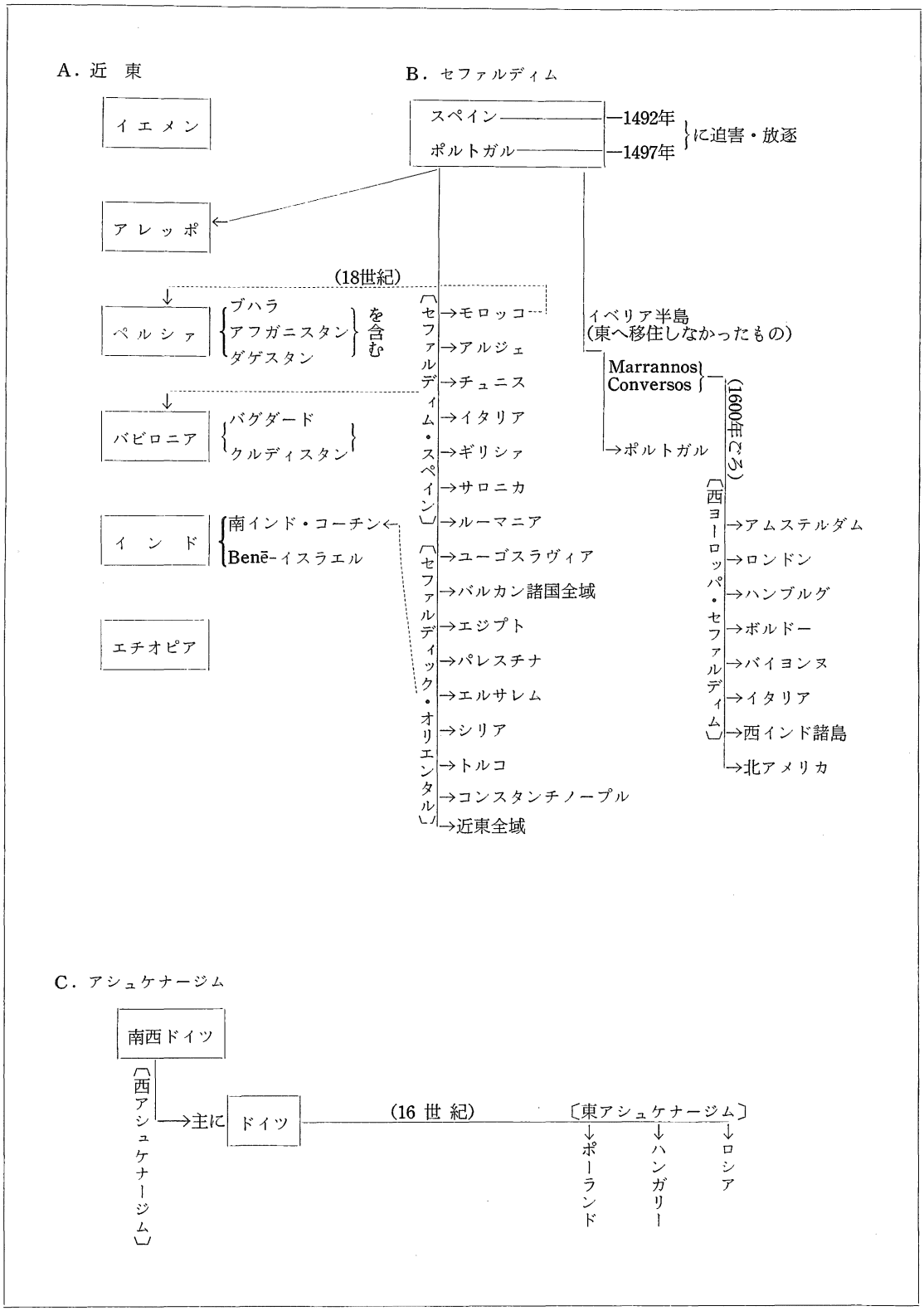
(3) ペルシァ（イラン）[16]

ペルシァのコミュニティーは，イスラエル北王国系の子孫であった。すでに，イスラエル南王国のバビロニア追放より約135年前に，北ペルシァの Assur, Medien に移された。（サマリアからの第1期追放は732年 v. Chr.）。このコミュニティーのユダヤ人は，宗教的な改新運動には関与せず，カナン人の信仰観念にとらわれたままだった。ペルシァでは，バビロニアとは対照的に，追放地において一学派を形成するような学者層をつくることは許されなかったので，創造的な教義の育成は考えられなかった。そのため，タルムードの文書解釈には無知で，敵愾心さえいだいていたといわれる。儀式音楽は，比較的古い相を保存しており，二三の点では，イエ

第1表　Diaspora のおもな地域

A．近東（西南アジア）
1．イエメン
2．アレッポ（シリア北西部の都市）
3．バビロニア（イラク）{4．バグダード / 5．クルディスタン}
6．ペルシァ（イラン）{7．ブハラ / 8．アフガニスタン / 9．ダゲスタン} を含む
10．インド {11．南インド・コーチン / 12．Benē-イスラエル（ボンベイ周辺）}
13．アビシニア（エチオピア）—Falaschas（黒ユダヤ）
B．地中海周辺及び西ヨーロッパ（セファルディム）
（a）地中海圏（セファルディム・スペイン）
14．スペイン
15．ポルトガル　}イベリア半島
16．モロッコ
17．アルジェ
18．チュニス
19．ジェルバ島
20．エジプト
21．パレスチナ—22．エルサレム
23．シリア—24．アレッポ
25．トルコ—26．コンスタンチノープル
27．近東全域
28．バルカン諸国全域 {29．ギリシァ—30．サロニカ / 31．ルーマニア / 32．ユーゴスラヴィア}
33．イタリア
（b）西ヨーロッパ（西ヨーロッパ・セファルディム）
34．オランダ—35．アムステルダム
36．イギリス—37．ロンドン
38．ハンブルグ
39．ボルドー
40．バイヨンヌ　}南西フランス
41．南フランス＝プロヴァンス {42．カルパントラス / 43．アヴィニョン}
44．イタリア
C．ヨーロッパ（non-Latin countries）（アシュケナージム）
（a）西・中央ヨーロッパ（西アシュケナージム）
45．南西ドイツ
46．ドイツ全域
（b）東ヨーロッパ（東アシュケナージム）
47．ポーランド
48．ハンガリー
49．ロシア
D．アメリカ大陸
50．西インド諸島
51．南北アメリカ
52．アメリ合衆国

第1図　Diaspora コミュニティーの歴史的相互関係



メン・コミュニティーのユダヤ人のそれに近い。18世紀には，モロッコ・セファルディムの儀式慣習に同化された。ただわずかの朗唱型（エステル記の朗読など）が，初期の固有の様式を，なおおもいおこさせる。

2. セファルディム[17]

地中海圏のユダヤ人コミュニティー，すなわち，**セファルディム・スペイン**は，イエメン，イラク，イラン，南インド（コーチン），アビシニア（ファラシャス）など，本来の東方系のコミュニティーとは様式的特徴の系列を異にし，それらとは分離される。文化的にもっとも強力なコミュニティーが，1492年の宗教裁判の結果，スペインから，また，1497年には，ポルトガルから，それぞれ追放された[18]。当時のスペインのユダヤ人の大部分は，地中海周辺へと離散した。かれらは，モロッコ，アルジェ，チュニス，イタリア，バルカン諸国（ギリシァ，ルーマニア，ユーゴスラヴィアなど），エジプト，近東全土（エルサレム，シリア，トルコなど）にコミュニティーをつくった。このため，もともと近東にあったほとんどのコミュニティーまでスペイン化し，そのシナゴーグの歌は，セファルディムの型に変容するに至った。（イエメンのような，わずかの例外はある。）現代ヘブライ語の発音にも，スペイン語の影響がみられるが，それはこのためである。また，セファルディムは，イタリアでも，古くからの歌の伝統を変えてしまった。

ところで，スペインのユダヤ人の一部は，1492年以後も，迫害にさらされながら，表面上，キリスト教への改宗をよそおって，さらにそこにとどまっていたが（かれらは，Marrannos または，Conversos といわれる），およそその100年後，再び追放の憂き目にあった。この追放によって，アムステルダム，ロンドン，ハンブルグ，イタリアなどの各地にのがれたユダヤ人が，その地でつくったのが，**西ヨーロッパ・セファルディム**のコミュニティーである。

スペインにのこった小数の Marrannos は，スペインでは，その土地に完全に同化してしまったが，ポルトガルでは，固有の儀式の残像を今日まで保存しつづけている。

セファルディムの音楽様式の特徴は，スペイン的要素をもっていると同時に，アラビアの Melos ととけあっていることである。ムーア風スペインにおけるアラビア都市文化との百年もの長期間の並存によって，儀式音楽のより古い相は，これら外部からの素材と混和されたのだった。セファルディムのもつ民俗音楽は，実に味わい深いものであるが，なかでも，スペイン語とヘブライ語の混合方言 Ladino（ラディーノ語）のフォーク・ソングは特筆に値しよう。

3. アシュケナージム[19]

アシュケナージムは，ヨーロッパの非ローマン諸国のユダヤ人をいう[20]。東アシュケナージムは西アシュケナージムから出たもので，歴史的には西アシュケナージムより新しい。中央ヨーロッパ（西アシュケナージム）のユダヤ人集団とその歌の様式は，16世紀の圧制で東方（東ヨーロッパ）へ移動した。そして，ポーランド王国（当時はキエフ，ウクライナも含む）では，Jiddisch（イディッシュ語—ユダヤ訛りのドイツ語・方言）が形成され，これによる多くの民謡が生まれた。西アシュケナージムのシナゴーグ音楽とスラブの旋律が混合して，東アシュケナージムの歌の様式を生むことになった[21]。

(1) 西アシュケナージム（西及び中央ヨーロッパ）[22]

南西ドイツのユダヤ人の歴史は，残された古い文書によって，中世後期までさかのぼることができる。ここでは，ドイツの民謡との接触が持続的に保たれていた。その痕跡は，ペンタトニック構造でわかる。儀式の歌でさえこの影響を受けた[23]。また，Kontrafaktur[24] が，家庭の歌に対してと同じように，シナゴーグの詩にも適用された[25]。ユダヤ・ドイツ民族詩のもっとも古く知られた本の1つには，E. Walich の蒐集（Worms 1595～1605年—54の詩）がある。また，17世紀の中葉以来，楽譜つきの民族的・宗教的旋律の印刷物が，ドイツとイタリアから出版された。こうして，1800年ごろ，創造的時代の頂点に達した。しかし，「ユダヤ人解放」と，それにともなったユダヤ・ドイツ的民族語の放棄によって，ユダヤのフォーク・ソングもまた解消してしまった。わずかなエンクラーヴェ[26]（とくに南西ドイツの古いコミュニティー）でのみ，ユダヤ固有の旋律の残りが今日までもちこたえられている。

(2) 東アシュケナージム（東ヨーロッパ）[27]

西及び中央ヨーロッパのユダヤ人は，その歌とともに，16，17世紀に迫害を受けて，東ヨーロッパ（ポーランド，ロシア）に移った。Ghetto の中では，Jiddisch の歌が栄えた。これらの歌は，その真に民族的な調べ，強い感情内容，そして，思想言語の直接性などの理由によって，今日まで，世界にあまねく知れわたっている。Hassidismus の神秘的な運動は，東アシュケナージムのフォーク・ソングの発展を助長した。この宗教運動は，法則実行以外に，個人的敬虔，神秘的歓喜，神的体験，そして予言観を新しく求めることを提起した。それは，カバリスト思想を改新した1つの民族運動ともいわれる。書物に精通した学者に反対し，また，公式の祈禱，形式，そして，規定されたことばそのものに反対する素朴な人びとの蜂起であった。それ故，もっともすぐれた Hassidismus の歌（Niggun）は，ことばを用いず，神

秘的なシラブルの上に無限のメリスマを用いながら，心のままに動く。Niggun の形式は，宗教的冥想の6つの相を順々に経て恍惚的なダンスでおわる。これらの Hassidismus の歌や，一般に東アシュケナージムの歌の形態分析は，異質的な素材の解きがたい混合を明らかにする。東アシュケナージムの，表現に対する衝動は，手元にあるあらゆる要素を占取した。そして，スラヴ，バルカン，ハンガリー，ドイツの歌や歌のモティーフから，器楽曲・行進曲・流行歌の借用にいたる混合のうえに，もっとも異なった性質の東洋的な Kantillation 形態と祈禱モードが用いられはじめた。けれども，Moll-Variante を優先的にとりあつかう調的基礎を通して，一致した上部構造が，つねに保たれた。[28] [29]

Ⅲ Diaspora と音楽

ユダヤの民族音楽は，この Diaspora という異例の歴史的展開を通して，鮮明に特色づけられる。ここで問題となるのは，ユダヤ人とかれらが住みついた他国との交渉であり，音楽に関しては，ユダヤ本来の音楽を Diaspora のコミュニティー周辺の民族音楽との相互影響である。

そこで，各地域のコミュニティー間で，その周辺音楽との融合の濃淡はどうなのか？いかなる種類の音楽が，ユダヤ人にとって，より伝統的といえるのか？——これらの疑問について簡単にまとめておこう。[30]

1. 宗教音楽について

ユダヤ音楽の伝統的要素解明に役立ちうる音楽としてその宗教音楽がある。シナゴーグの音楽，とりわけその中の Bibel Kantillation は，周囲の音楽の影響を受けながらも，ユダヤ教の伝統のもとで，古代の形態を（コミュニティーによって程度の差はあるけれども）とどめていると思われる。シナゴーグ外の宗教的儀式音楽（シャバト・祝日の歌，結婚式の歌など）[31]には，古い時代の要素はほとんどないものが多い。[32] 世俗音楽では，ユダヤ音楽的色彩が感じられるとはいえ，ほぼ完全に周囲の音楽を融合し，古代的・伝統的要素は失われてしまっている。世俗音楽にみられるユダヤ音楽と他の民族の音楽との融合音楽が，なおユダヤ的なものを保持していることは明らかだが，その分析研究のためには，むしろユダヤ音楽をとりまく外的諸要素の知識が第一義的に必要なものとなる。

以上のように，ユダヤ音楽では，宗教により密接な歌ほど伝統が守られているといえよう。

また，ユダヤ的 Melos の存在・特質は，なによりもまず，そのコミュニティーの宗教儀式への帰属の程度で，再検討される。Bibel Kantillation や Gebet（祈禱〔歌〕）のような厳格な礼拝形式では，周囲（他国）の音楽の採用はもっとも少ないが，礼拝の独唱部分，なかば礼拝的な形式，世俗的形式となるにつれて，しだいに外的要素の採用は増大する。ゆえに，古来の宗教儀式に，より忠実なコミュニティーほど，ユダヤ音楽的特質を多く保っているということになる。

2. 地理的環境について[33]

Diaspora の地理的な環境によっても，伝統の保存は左右された。周囲から隔離されているところ，[34] 圧制のきびしい不自由な環境などにおいては，[35] 伝統は比較的よく保たれてきたのに反し，行動が自由なところでは，それは，消失してしまっている。

Diaspora では，一般に，社会的制約が，ユダヤの民族音楽の自由な発展を許さなかったが，Ghetto の壁の内では，あらゆる種類の圧制にもかかわらず，ユダヤ本来の文化の，より豊かな層的構成をともなった閉鎖的な共同社会生活が営まれ，固有の民族の歌も保たれた。自由のない Ghetto 生活においては，ある種の民俗歌（狩猟歌，動物のなき声のまね歌，戦いの歌，酒宴歌など）[36] が発達しないままとどまった一方，つぎのような歌は，一面的に強力に発展・成長した。

（a）半宗教的儀式歌（倫理・哲学的・神秘的歌詞を好むもの。旧約聖書の抒情的部分の多数の改作）

（b）家庭・だんらんの歌（単純な記述的な型から，歴史的な歌・民族叙事詩のより精巧な形式にいたるまでの，日常生活の表現）

他方，ユダヤの住民が自由な行動を許された場合（たとえば，中世ヨーロッパの一時期，アラビアのコミュニティー，19世紀の解放以後など）には，固有の表現としてのユダヤ民俗歌は消え去っていった。

オリジナルの民族様式の前提は，自国の文化と国語なのだが，上述のように，ユダヤ民族は，Diaspora によって全く変則的な歴史的展開を余儀なくされたのである。[37]

地域的にみて，もっともよく伝統を保存していると考えられるのは，純粋にアジア的なユダヤ人（イエメン，バビロニア，ブハラ，シリア，ペルシャ，インドなどのコミュニティー）[38] や，ジェルバ島などの周囲から隔離された島のユダヤ人であり，[39] そのつぎは，地中海沿岸のセファルディム＝スペインで，ユダヤ的要素のもっとも少ないのは，アシュケナージムである。

*　*　*　*　*

要するに，Diaspora の中で，他のコミュニティーにくらべ，より宗教的，より隔離的なコミュニティーが，もっとも多くユダヤの伝統的要素を保ちつづけてきてい

る，ということになるのである。

注

1）Diaspora ユダヤ人のパレスチナ外への離散，または，離散したユダヤ人。

2）*MGG VII* s. 224～261

3）上ガリレアの地名（=Safed)。セファルディムの大きな流浪のうち，カバリスト（中世に成立したユダヤ神秘教信奉者）の集結地点となった。カバリストについては，*MGG VII* s. 242 (*Kabalah*) 参照

4）Hasidim=(英) Hassidism；(独) Hassidismus. *Grove* では，*III* p. 311, *IV* p. 633

5）これらの時代名称は，便宜上のものであって，a，b，cは，時代的に交錯している。近東のユダヤ人は，70年 n. Chr. 以前に，すでに，パレスチナ以外に住みついている例がある（本稿II「ユダヤ人コミュニティーの歴史的背景」参照)。また，1948年のイスラエル共和国独立以前，すでに19世紀末から，本格的なパレスチナ移住は始まっており，その一方で，共和国独立以後も，Diaspora の地域からパレスチナに移住しないでいるユダヤ人も多い。（さらに，アメリカ合衆国は，20世紀の新しい Diaspora 地域とさえ考えられる。)

1965年の世界各地のユダヤ人口（M. Gilbert. *Jewish History Atlas*, 1969 による)。ヨーロッパ：英国 450,000；アイルランド 5,000；デンマーク 6,500；オランダ 25,000；ベルギー 35,000；ドイツ 28,000；オーストリア12,000；スイス20,000；フランス 250,000；スペイン 5,500；ポルトガル 2,000；イタリア33,000；ギリシャ 6,000；ユーゴスラヴィア 6,500；ブルガリア 6,000；ルーマニア 120,000；ハンガリー 100,000；チェコスロヴァキア23,000；ポーランド35,000；ソ連 2,250,000／アフリカ：モロッコ 120,000；アルジェリア 130,000；チュニジア33,000；エチオピア12,000；ケニア 1,000；ザンビア 800；ローデシア 7,000；南ア 15,000／アジア：トルコ 60,000；イエメン 2,000；インド20,000；ビルマ 200；中国 200；香港 200；日本 1,000／オセアニア：オーストラリア67,000；ニュージーランド 5,000／アメリカ大陸：アラスカ 120；カナダ 250,000アメリカ合衆国 5,845,000；メキシコ28,000；グアテマラ 1,000；パナマ 2,000；コロンビア 10,000；ヴェネズエラ 6,000；エクアドル 3,000；ペルー 4,000；ブラジル 135,000；ボリヴィア 4,200；パラグアイ 1,100；チリ30,000；ウルグアイ45,000；アルゼンチン 450,000／イスラエル 2,166,000 (1965年)→3,164,000 (1972年国勢調査・暫定数)　なお，世界のユダヤ人の推定総人口は 1,300～1,400万人。

イスラエルへの移住の程度は，各コミュニティーによってまちまちである。たとえば，イエメンのユダヤ人集団は，1949～50年（当時約40,000人。一説には，46,000人，48,000人とも。)，実質的に全員，飛行機でイスラエルに移された (*MGG VII* s. 267)。その時の "Magic Carpet" の逸話は有名である。クルディスタンの集団も，1950～51年，イスラエル移住を完了した (*MGG VII* s. 271)。しかし，ペルシャの Isfahān の郊外 Jubareth の場合のように，イスラエル独立以後も，現地からほとんど動かないで定住したままのコミュニティーもある（小泉文夫先生談)。また，エジプトにも，若干のユダヤ人がまだ残っているといわれる。

6）*MGG VII* s. 261 ff.

7）Diaspora のコミュニティーのうち，セファルディム，アシュケナージムの音楽については，梁島章子氏の論文『イスラエルの音楽について— Sephardim 及び Ashkenazim の音楽の背景—』（お茶の水女子大学・文教育学専攻科修了論文）がある。

8）本稿では，近東コミュニティーを単独に考察するが，それは，セファルディムの影響を濃く受けており，セファルディムの範疇に含めてあつかうことも可能である。

9）第1表・第1図は，*MGG VII* の「ユダヤ音楽」の項 (s. 224～285) を中心に，*JM* (p. 143)，*Grove III* (p. 310)，*Das Musikwerk*：*Hebräische Musik* (s. 7) などについて，Diaspora に関係ある記述を総合してまとめ，作成した。

第1表について。ここにあげたコミュニティーのほか，「ユダヤ教・宗派」として，Schabbathianer, Karäer, Samaritaner がある (*MGG VII* s. 274～275)。これらは，人種的にはユダヤ人だが，民族学的にはそれと異なる。また，アメリカ合衆国には，セファルディムとアシュケナージムが入った。アメリカ合衆国のシナゴーグ音楽については，*Grove IV* p. 635 ff. 参照。12，13は，*Grove* では，オリエントの "Other Groups" としてあつかわれている (*Grove III* p. 309 f.—11の記述はない)。一方，*MGG* では，11，12，13は，セファルディムの „Sondergruppen" となっている (*MGG VII* s. 273 ff.)。要するに，Sephardic-Oriental 要素をもつグループとでもいうべきもの（コーチン=黒ユダヤという説もある)。21，22は，スペインにおける1492年のユダヤ人放逐以後，再び故地に到着したセファルディムであって，70年 n. Chr. 以前のパレスチナのユダヤ人ではない。このセファルディムの影響で，今日のイスラエルのヘブライ語の発音は，スペイン語的要素を含んでいる (*MGG VII* s. 273)。47は，内容的にはむしろ西アシュケナージム。

第1図について。近東のコミュニティーの成立（パレスチナより現地への移住）年代は詳らかではないが，ペルシャ，イエメン，バビロニアなどへの離散は，70年 n. Chr. より，かなり以前にさかのぼるとされている。たとえば，バビロニアのバグダードのコミュニティーは，「バビロニア捕囚」(587年 v. Chr.) 以来，定住しているものである (*MGG VII* s. 270)。（「バビロニア捕囚」については，旧約聖書・エレミア書第39章参照)

10）*MGG VII* s. 266～270

11）*MGG VII* s. 267 では，その証拠として，Grabinschriften in Unteren Galil（下 Galil の墓誌銘）とのみ記している。Galil は Galiläa か？

12）注5）参照

13）第1ヒムヤル王朝は，前2世紀末ごろから 300年 n. Chr. ごろまで，また，第2ヒムヤル王朝は，4世紀から525年ごろまで，それぞれ続いた。ヒムヤル族は，古代南アラビアの民族。（平凡社：世界歴史事典 16 p. 34)

14）*MGG VII* s. 270～271

15) *MGG VII* s. 271 Kurdistan は中央アジア西部で，現在のトルコ，イラク，イランの国境にまたがる山岳地帯。
16) *MGGVII* s. 271～272
17) *MGG VII* s. 272 ff. Sephardi, Sepharad (pl. Sephardim)：アジアの一地域（北パレスチナか？）——ユダヤ人が第一神殿壊滅後追放されていった地（オバデヤ書1：20)。中世にはスペインを意味した。したがって，スペインのユダヤ人とその後裔をこのようによぶ。
18) *MGG VII* s. 245
19) *MGG VII* s. 246～247 Ashkenazi (pl. Ashkenazim)：旧約時代の people の1つ（創世紀10：3；エレミヤ書51：27)。9世紀より，ドイツ人を意味した。したがって，ドイツのユダヤ人とその後裔をこのようによぶ。
20) *MGG VII* s. 275
21) H. Avenary は，このアシュケナージムのところで，「東方へ大移動をしなかったものは，強制（仮）キリスト信者（Marannen）としてイベリア半島にのこり，1600年ごろ，宗教裁判からのがれ，『ポルトガル・コミュニティー』（アムステルダム，ハンブルグ）をつくった」と書いているが（*MGG VII* s. 247)，これは，セファルディムのことである（同書 s. 272「セファルディム」参照)。
22) *MGG VII* 275
23) *JM* p. 136 参照
24) *Grove IV* p. 626 に例がある。
25) Kontrafaktur：宗教歌の歌詞を普通の歌謡に改作すること。
26) Enklave：飛領土(他国の中に入りこんでいる領土)。
27) *MGG VII* s. 251, 276
28) *MGG VII* s. 276 なお，*In Israel Today* (Deben Bhattacharya—Westminster Hi-Fi WF 12026～12029) Vol. 4, Side 1, Bd. 6 参照
29) *MGG VII* s. 276 譜例21参照
30) *MGG VII* s. 262～263
31) 例外的に古代的伝統を伝えているものとしては，イエメン・コミュニティーの結婚式の歌がある（E. Gerson-Kiwi)。*MGG VII* s. 268, *Grove III* p. 307
32) たとえば，シナゴーグ外の宗教的かつ倫理的な歌には，その地方の詩人の詩（歌詞）にその国の民謡の旋律をつけてうたったり，同じ歌詞（Text）を，異なった土地で，それぞれ別の旋律でうたったりするものがある（10～17世紀。ヨーロッパでは Zĕmirot, オリエントでは Pizmonim)。*HB I* s. 153 参照
33) *MGG VII* s. 261～264 参照
34) 例＝島など。
35) 例＝Ghetto 生活など。
36) これらの歌は，自由な行動を許されたコミュニティーでは，重要な機能的意義をもっている。
37) ユダヤ人コミュニティーで発展した合成言語：Ladino, Jiddisch, 種々のアラム-アラビア語方言。これらは，ヘブライ語（アラム語）と，それぞれの地方の言語の融合の結果，生まれたものである。
38) *Grove III* p. 309「ブハラには，イエメン，バビロニアとならんで多くの祭式の中に，すぐれたオリジナルの民間伝承がある」
39) Djerba 島のユダヤ音楽の研究には.R.Lachmann. *Jewish Cantillation and Song in the Isle of Djerba*, Jerusalem 1940 がある。

注で用いた略号

Grove III	E. Gerson-Kiwi. *Folk Music*: *Jewish*. (*Grove's Dictionary of Music, Vol. III, Fifth Ed.*, London 1954)
Grove IV	*E. Werner. Jewish Music.* (*Grove's Dictionary of Music, Vol. 4, Fifth ed.*, London 1954)
HB I	A. Z. Idelsohn. *Der Jüdische Tempelgesang*; P. Wagner. *Der Gregorianische Gesang.* (*Handbuch der Musikgeschichte, Erster Teil*, Berlin 1930)
JM	A. Z. Idelsohn. *Jewish Music in Its Historical Development*, New York 1929.
MGG VII	H. Avenary. *Geschichte der jüdischen Musik*; E. Gerson-Kiwi. *Jüdische Volksmusik*; Gerd Benjamin Pinthus= E. Gerson-Kiwi. *Das Musikleben in Israel.* (*Musik in Geschichte und Gegenwart VII*: „*Jüdische Musik*")